

当面のスローガン

- 差別事件の糾弾闘争を強化
- 全ての学校で同和教育実践を!
- 全自治体で同和・人権行政を!



解放新聞社山口支局

〒753-0074 山口市中央1-5-3
 TEL 083-923-2303
 FAX 083-921-1919
 編集発行人 松岡 広昭

萩で西中国同和教育交流会

差別の現実から深く学ぶ

第26回西中国同和教育交流会が、山口県萩市の白水会館(隣保館)で11月3、4日に開催され山口、島根、広島から同和教育に取り組み教職員を中心に35人が参加した。地元のフィールドワーク、記念講演、実践報告など活発な議論がおこなわれた。



特措法により住環境は整備されたが、保護者の半数以上が母子家庭で、生活保護率も高く厳しい差別の現実を説明する大田さん(写真中央)

地元代表あいさつで、麻野他郎・山口県同教委委員は「山口県内の学校でもあいついで差別事件が起きています。差別の現実には深く学ぶという意識を持って、この二日間しっかりと研修と交流を深めて欲しい」と述べた。

解放同盟山口県連名 菅顧問より「解放運動と私」と題して記念講演が行われた。現在96歳になる岩田さんは、山口県の部落解放運動の創設者の一人でもある。講演では岩田さん自身の幼い頃からの生い立ちと厳しい部落差別の現実と生活実態、その後の解放運

動の取り組み、さらには萩の部落だけで使われている「隠語」についても詳しく説明があった。(2面)

地区のフィールドワークをおこない学習を深めた。2日目は各県から3本の実践報告があった。島根県立益田高校の坂井智子さんから



岩田名誉顧問の講演を熱心に聞く参加者



数年間で寺の歩道の庭木は、部落の側(左側)だけが高くなっており、右側にある小学校から部落が見えないようになっていた。支部の指摘により数年前によりやく同じ高さにしたが面影は残る(写真左の庭木)

長野で第41回全研 真摯な討議 解放運動の再生に向けて

部落解放研究第41回全国集会在長野市のビックハットを主催する。11月6日から8日に開催され、38都道府県から6800人が参加し、全体会と9分科会、フィールドワークがおこなわれた。

初日の全体会では、稲積謙次郎(元西日本新聞社)さんと松岡徹(解放同盟中央書記長)さんが『地方分権化の人権・同和行政と部落解放運

動のあり方』と題したパネル討論をおこなった。パネル討論では、昨年の飛鳥会事件などによって、解放同盟の社会的な信用が失墜したことやその背景、今後の同和行政・部落解放運動のあり方について議論した。

「国民的課題」としての運動を、松岡さんからは、今回の不祥事の背景や「特措法時代の光

と陰」、同盟員の意識改革、魅力ある運動とは何かなどの厳しい総括を提起した。その中で、これまでの同和行政は「国民的課題」と言いながら、同和行政は「同和地区の行政」になっていかなかったか。そのことで部落問題は「部落の問題」となっていないか。国民的課題という広がりを持った行政としての取り組み・施策・要求・運動の

あり方を今後追求していかなければいけないと訴えた。人権行政指針には「実施計画」が必要。稲積さんからは、今後の解放運動と人権行政のあり方について厳しい問題提起がおこなわれた。

人権行政とは「地方自治そのものの課題」である。現在、あらゆる人権課題に取り組むために各地で「人権行政指針」の策定が取り組まれている。でも、ホントの意味での「人権行政指

針」ではなく現状は「絵に描いた餅」になっている。そうしないためには「基本指針」と「実施計画」がセットになっている必要がある。人権一般などという概念は存在しない。人権とは個別の課題に向き合うことである。問題は、それぞれの差別問題の根っこにある普遍的価値を求めることだ。人権一般論と、普遍的な差別の根っこをかけることは次元が違う。その上で「実施計画」の検証、評価をしないと意味がないと、現在の人権行政の問題点を提起した。



パネル討論で問題提起をする稲積さん(左)と松岡さん(右)

徒を受け入れ、これまで高校での教育が困難とされてきた障がいのある生徒の進路保障の取り組みが報告された。

山口市立小郡小学校の中野晴美さんからは「外国にルーツを持つAさんと出会って」と題した報告があった。日本語の習

得が厳しいAさんに対して、今後どのような支援をおこなっていくのかなど、ニューカマーの子どものための教育について議論された。

広島県呉市立郷原小学校の藤川英子さんからは「あれから子どもたちは」と題した報告があり、解放子ども会で関わってきた子どもたちが、その後、青年になってどういう状況になっているのか、その現実から今後の解放子ども会について課題提起がなされた。

山口県版

「萩」編

最年長の活動家(九六歳)

岩田利平さん

第26回西中国同和教育交流会で、岩田利平・部落解放同盟山口県名譽顧問からの聞き取りをおこなった。県内の活動家で最高齢の岩田さんの話は、県内の水平社創立、解放委員会、解放同盟で活動してきた経験と、萩の部落の過去・現在が語られた。その一部を紹介する。

私の生い立ち

一九一一年、岩田利平さんは萩の玉江部落で生まれ育った。親は下駄の「歯替え」(直し)をやっていた。「歯替えはないですか」と声をかけて行商をしていた。大きな下駄屋などの商売をするのは



生涯をかけて解放運動に取り組んできた思いを語る岩田利平さん

一般地区の人。部落の人はその下請け的な仕事ばかりだった。当時の部落女性の仕事は、カゴを担いで、古着や古布団などを買い集め、問屋に持って行き売っていた。それが主な部落の人たちの仕事だった。

岩田さんも靴屋の仕事で、大阪の百貨

店の高級靴問屋の靴職人として働いていた。当時、靴屋は部落の人が多かったが、職場では一般の靴職人さんがいて、親方も「土族」だったので、口が裂けても自分が部落出身だとは言えなかった。

職場の近くの浪速には西浜部落があり、ある時、その親方から「エタの部落には行っちゃいけない」と言われ、やっぱり都会にいても部落差別はあるんだと思わされる出来事だった。軍隊の中でも差別はあった。軍隊に入るところ、四本指を突き出して「あれはこれだから、つきあうな」と言われたこともある。今思えば、「オレもエタだが何が違うのか」と言い返したかったが当時は言えなかった。こ

玉江部落の隠語

今の玉江部落に住む40代以上の人はわかる隠語がある。「特措法」以前は、部落に住んでいても自分たちでみていられないくらい厳しい生活実態があった。そういう生活状況で生きていかなければいけない状況が「隠語」を生んできたのだという。

逆に言えば、そのような厳しい状況のなかでも、部落の人たちはしたたかにたくましく「隠語」を使いながらも生き抜

厳しい差別の現実

この玉江地区には約90戸あるが、その一割ぐらいいは一般地区の人と結婚している。昔はそんなことはなかった。本人同士は一緒にいたが、川から向こうの人は、以前は顔をあわせてもモノも言わなかった。特措法後は、声ぐらいいかけてもらうようにはなったが、周辺地区の人との結婚はいまだにない。自分の子どもは神奈川県で就職し、結

婚して5人の子どもたちと生活している。でも息子から送られてくる手紙には絶対に「玉江3区」とは書かれてはいない。その宛名を見て、部落出身で部落外で生活している人の気持ちがよくわかった。だから、自分が息子に手紙を送るときも、息子が気を使っているの

るので「玉江3区」とは書けない。これが現実である。もともと、一般地区の人が部落問題を理解して欲しい。昔と違い、衣食住において何も変わらないのだから。

「キンマル」(部落民の代名称)「あの子はキンマル(部落民)か」「キンマル(部落民)でない」となど使用、特に部落民同士で使われる言葉である。逆に「ネス」(部落外)「ネスゴロウ」(部落外の人)を指す言葉である。この言葉は、差別を受けた部落民が敵意を強く表す時に使う言葉である。差別的でない地区の人は「リョウマル(一般の人)」とも使う。

「バレ」(死んだ牛馬)。「オノケ」(精肉・バレと逆の言葉)玉江部落には江戸時代から終戦後まもなく廃業するまで「斃獣場」があった。死んだ牛馬の肉は、衛生的には食べない物であったが、私たちが部落ではほとんどの人が食べていた。部落にとっては大きな食料源であり、栄養商品でもあった。逆に「オノケ」(精肉)は、公認の場であった牛馬の肉で一般商店肉屋やスーパーなどで売っている良い肉のこと。

「ジョウセ」(警察官)例えば「ジョウセ(警察官)がカマッタ(来た)、フケタ(帰った)」と使う。町で何か事件が起こり、迷宮入りした。今もお、居住調査に来て彼らが、部落を離れるまで恐怖心が去らない」と言う。

「なんか変だよ、人権教育」

第16話「切られた人間関係を紡ぎ直す」

山口県人権啓発センター 川口泰司

(前回までのあらすじ) 4年間言えなかった、先輩についてのカミングアウトした。すると先輩から思わぬ反応が...

「太田先輩、実はボクも部落出身なんです。先輩はビックリして先輩はビックリして車をとめた。さっきまで自分が言っていたことが、どれだけボクを傷つけていたのか、先輩が動揺している姿は一目でわかった。「ごめん、ごめん。川口、そういうつもりじゃなかったんや」

しばらく二人の間で沈黙が流れた。「先輩、この前、ボクの実家に泊まったでしょう。あん時、下の居間で寝てもらいましたよね。実は、オレの部屋には部落問題の本とかおいてあったからなんです。」

「解放研の合宿とか会議でも、いつもバイトと言ってウソをついてたんです」話し始めたら、これまでの四年間、ずっとたまってた思いがとまらなくなり、すべてを先輩に話した。どれくらい時間がたつたのだろうか。気がつけば、先輩は

ボクの目をしっかりと見つめ、話を聞いてくれた。ボクの顔は涙でクシャクシャになっていた。そして先輩も自分の生い立ちを語り始めた。「川口のそんな思いとか知らんと、オレ、今まで、いろんなこと言うてきたな。ほんとに悪かった。」

「実は、オレもまだ誰にも言っていないことがあんなねん。オレもお母ちゃん、小さいころ亡くなっておれへんねん。この前、母ちゃんの法事があったとき、初めてアニキに聞いたんや。じつはうちの母ちゃん、在日韓国人やったんや。俺も在日のこととか、勉強してへんからようわからへんけど。このことは、まだ誰にも言っていないんや。お前が言うてくれたから、俺もお前に隠したくなかったんや。」

今度はボクがビックリした。まさか、こんな展開になるなんて、夢にまで思っ

ていなかったからだ。一〇〇円の情報は一〇〇円しか返ってこない。ボクの一〇万円の話に先輩も一〇万円を返してく

れた。差別によって、ずたずたに切り裂かれていた、ぼくたちの人間関係の糸をもう一度、つむぎなおすことができた。それからは、先輩には彼女との恋愛で親に反対されていることの相談に乗ってもらったり、サーファーの仲間のなかで、差別発言があっても「おかし」と指摘してくれるようになった。サーフショップの仲間にも、少しずつ自分の立場をカミングアウトしていった。部落を隠して生きることもできる。でも、ボクは部落出身ということをもう一度「選んで」生きていくことにした。部落出身ということ、名前を、去っていった友だちもいた。でも、その一〇〇倍くらい、本当の意味で「つながる仲間」とたくさん出会ってき